

令和元年6月18日現在

機関番号：31501

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H05935

研究課題名(和文) コミュニティ・スペシフィックを志向するアーティストによる地域創造力の開発

研究課題名(英文) A Development of Regional Creativity Projected by Community-Specific Oriented Artists

研究代表者

市川 寛也 (Ichikawa, Hiroya)

東北芸術工科大学・芸術学部・講師

研究者番号：60744670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、従来のパブリックアートを批評する際に用いられてきた「サイト・スペシフィック」に対して、地域住民との対話を重視する「コミュニティ・スペシフィック」という評価軸の有効性を検証してきた。具体的な方法論として、期間の定められた「展覧会」という手法に限らず、継続的に芸術と関わることで「場所」を開くことの重要性を導き出した。そこでは、非職業的芸術家としての市民がそれぞれの日常生活の延長線上においてプロジェクトに参加することで、一人ひとりの創造性が引き出されていく。このような場を設えることにアーティストが地域創造に関わる意義が認められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本各地で開催されているコミュニティ型アートプロジェクトや地域芸術祭について、従来の「サイト・スペシフィック」とは異なる評価軸を設定することで、地域創造に芸術が果たし得る役割を拡張することを試みた。すなわち、「もの」として設置された作品を鑑賞するだけでなく、地域住民が主体的に芸術実践に参加することができる関わり方の回路の拡張である。特に、一人ひとりの創造性を引き出すための「場所」のあり方について具体的な実践を踏まえた研究を行った。狭義の芸術を超えて、個人の生活やその複合体としての社会を自らの手でつくりあげていくことにこれからの芸術の社会的意義を見出すことができる。

研究成果の概要(英文)：In this study, the author has verified a significance of community-based art. The term "site-specific" is often employed to criticize public art. In contrast, "community-specific" is based on conversations with local residents. Community-specific art practices are not limited to temporary exhibition. Opening a creative space is an effective method to realize this concept. Citizens as non-artists continuously participate in art-based project in their ordinary lives, and they can show off their hidden creativity. Community-specific oriented artists can play an important role in regional cration to establish a place opened to anyone who shares common interests.

研究分野：芸術学

キーワード：アートプロジェクト パブリックアート 文化政策 アートマネジメント 地域資源 場所 コミュニティアート 芸術祭

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

美術史家のミウォン・クウォン(2002)は、著書『*One Place After Another*』の中で、新たなパブリックアートについて取り上げる際に、従来の「サイト・スペシフィック」概念から転換する必要があることを指摘している。ランドアートをはじめとする環境芸術の評価軸として用いられてきた「サイト・スペシフィック」という芸術学上の概念は、作品と場所との視覚的な関係性に重心を置いたものであった。これに対して、社会参画型のアート(Socially Engaged Art)の台頭など、地域社会と直接的に向き合う芸術実践が増加している現代において、新しい評価軸を設定することが本研究に取り組む動機となっている。

2008年にサンフランシスコ近代美術館で開催された企画展「THE ART OF PARTICIPATION: 1950 TO NOW」は、戦後の参加型アートの状況を展望するものであった。キュレーションを担当したルドルフ・フリーリング Rudolf Frieling は、参加型アートを実践する上でアーティストに求められる技能として「物事を起こすこと」や「対話すること」などを挙げている。ここでのアーティスト像は「もの」としての作品を制作するだけでなく、独自の視点でプロジェクトを生み出し、人々をこれまでとは異なる回路でつなぎながら、新たな創造活動がなされる「場」を構築していく存在として描かれている。

こうした観点を前述の「サイト・スペシフィック」概念からの転回に重ねた時、本研究が主軸に据えた「コミュニティ・スペシフィック」という視点も設定される。そこでは、景観(site)の特性を活かした「もの」としての作品を設置するだけでなく、既存のコミュニティを構成する地域住民との対話を重ねながら「こと」としての創造的な活動を起こしていくことが重視される。これからの地域社会と芸術との関わり方を研究する上で、住民の地域理解の深化やコミュニティ活動の活性化等に重心を置いた「コミュニティ・スペシフィック」という概念の有効性を検証することには一定の学術上の意義が認められる。

### 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究課題においては今日のアーティストに求められる職能として「コミュニティ・スペシフィック」という評価軸を設定し、その社会的な有効性を検証することを目的に掲げた。ここで言うところの「コミュニティ・スペシフィック」とは、従来の「サイト・スペシフィック」に対して、積極的に地域社会に入り込み、地域住民との協働によって達成される社会参画型のアートを念頭に置いた概念を指している。今日では、日本各地でコミュニティ型アートプロジェクトや地域芸術祭が開催されているが、それらの中には従来の「展覧会」の仕組みを踏襲し、「もの」としての作品を鑑賞することに重きを置いた取り組みも少なくない。

そうした状況にあって、本研究が着目するのは「日常(生活)」の延長線上に生み出される芸術実践である。とりわけ、近年のコミュニティ型アートプロジェクトにおけるアーティストの役割として、非専門的芸術家(地域住民)の創造性を引き出す点に着目し、新しいタイプのコミュニティを形成する基盤としての芸術の意義を明らかにする。これにより、地域社会における創造性(=地域創造力)を開発する職業としてのアーティスト像を提示する。

### 3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では理論と実践の両面から「コミュニティ・スペシフィック」という評価軸の有効性を検証した。

理論研究として、前述したミウォン・クウォンの著書に記載のある海外の事例や国内の先進的な事例を調査し、芸術と地域との関わり方について分析を試みた。アメリカ合衆国のシカゴで開催された「カルチャー・イン・アクション」など、過去に開催されたプロジェクトについては文献を中心に調査を行った。あわせて、ドイツで開催された「ドクメンタ」や「ミュンスター彫刻プロジェクト」については、文献調査に加えて平成29年に実地調査を行った。これらの研究を通して「コミュニティ・スペシフィック」という概念の発生する背景について考察した。また、宮沢賢治が掲げた「農民芸術」概念を援用することで、この概念を日本の地域社会における芸術実践に適用する理論的な枠組みを示した。

実践研究として、具体的なアートプロジェクトを通じたアクションリサーチを行った。研究開始当初の計画では平成28年度に開催された「茨城県北芸術祭」を取り上げる予定であったが、ものとしての作品展示を通じた観光振興に重心を置いていたことから本研究の課題を明らかにする上で十分な成果を得ることができないと判断し、対象から除外した。このことは、今日の行政主導による大規模な芸術祭の持つ課題として読み解くこともできる。一方で、茨城県水戸市におけるアートプロジェクトについては、学校や地域等との連携を通じたプロジェクトや具体的な場所との関わりが深い取り組みであったことから、当初の研究計画に即してアクションリサーチの対象として位置づけた。あわせて、平成29年度に研究機関が筑波大学(茨城県)から東北芸術工科大学(山形県)に異動したことに伴い、東北地方における新しいフィールドを開拓した。特に、岩手県胆沢郡金ヶ崎町では、重要伝統的建造物群保存地区内の保存物件を舞台に地域芸術の実践の場を創出するプロセスを通じた研究に着手した。

本研究の着地点としては、これらの理論研究と実践研究とを融合させていくことを目指してきた。従来の芸術学研究において地域創造との関連を取り扱う際に、実践者の言説と研究者の理論とが乖離することも少なくなかった。このような課題も踏まえ、アーティストを研究協力者に迎え、対話を重ねながら方法論を構築することで、コミュニティ・スペシフィックな芸術

実践のモデルを構築することに努めた。

#### 4. 研究成果

上記の方法に基づき、本研究では(1)国内外の地域と芸術の関わり方の調査を通じた「コミュニティ・スペシフィック」概念の理論形成、(2)アートプロジェクトの実践を通じたアクションリサーチを行った。以下、実施年度毎に研究成果の概要を記す。

〔平成28年度〕

##### 1)「コミュニティ・スペシフィック」概念の理論研究

本研究を貫くキーワードである「コミュニティ・スペシフィック」について、文献調査を中心に理論を構築した。特に、ミウオン・クォンが引用元として挙げているアーティストのクリスティー・スペランディオについて、作例や作家の言葉を参照することにより、「コミュニティ・スペシフィック」という言説の生まれた背景について考察した。一連の研究成果については「「コミュニティ・スペシフィック」概念の有効性に関する一考察 - 美術と場所の関係性を巡って - 」(雑誌論文)として発表した。

##### 2) 茨城県水戸市におけるアクションリサーチ

3年間の研究期間を通して取り組んだアートプロジェクトとして、茨城県水戸市において以下に示す二つの実践に取り組んだ。

**放課後の学校クラブ** 現代美術家の北澤潤(研究協力者)の発案のもと、地域の公立小学校において2011年から取り組まれているアートプロジェクトである。子どもと大人が一緒になって「もうひとつの学校」をつくることを目指して活動が行われる。一連の実践を通して、アートプロジェクトの手法に基づく地域と学校の連携の在り方について考察を行った。特に、地域に根差した美術教育(CBAE: Community-Based Art Education)の観点から分析を行った。研究成果については「地域とともにつくる開かれた美術の学び」と題して『アートエデュケーション思考』(図書)に掲載した。

**ワシントン現代芸術センター** 現代美術家の矢口克信(研究協力者)によって2008年から取り組まれている芸術実践についてアクションリサーチを行った。矢口は、2008年に水戸芸術館現代美術センターの主催による「カフェ・イン・水戸2008」に出展作家として参加して以降、水戸市の中心市街地にある空き家を「小料理喫茶ワシントン」と名付け、営業を続けてきた。2013年に作家自身の手によって建物が解体されてからも、「ワシントン跡地」として演劇などを行ってきた。本研究の実施にあたり、学外の研究拠点として劇場機能やアトリエ機能を備えた「ワシントン現代芸術センター」の環境整備を進めた。あわせて、平成28年度には「小料理喫茶ワシントン」の徒歩圏内にあったファッションビル「サントピア」の解体に即して、解体の過程をフィルムカメラで記録するとともに、往時のバーゲンセール行列を再現するアートプロジェクト《祭後のバーゲンセール》を開催した。

〔平成29年度〕

##### 1)「コミュニティ・スペシフィック」概念の国際比較

文献調査を中心に進めた前年度の理論研究を裏付けるために、「コミュニティ・スペシフィック」な芸術実践の国際的な動向についてドイツとアメリカ合衆国において調査を行った。ドイツでは、5年毎に開催される「ドクメンタ」(カッセル)と10年毎に開催される「ミュンスター彫刻プロジェクト」(ミュンスター)を調査し、日本各地で開催されるコミュニティ型アートプロジェクトとの比較研究を行った。アメリカ合衆国では、シカゴで取り組まれている「アフタースクールマターズ(ギャラリー37)」を実地で調査し、放課後活動におけるアーティストと高校生との協働について聞き取りを行った。後者の事例については、「放課後の学校クラブ」の実践との比較研究を行う一つの指針として位置づけられる。

##### 2) 茨城県水戸市におけるアクションリサーチ(継続)

前年度に引き続き、「放課後の学校クラブ」と「ワシントン現代芸術センター」において実践研究に取り組んだ。一連の成果については、日本における「コミュニティ・スペシフィック」な芸術実践の展開事例として、平成29年8月に韓国の大邱で開催されたInSEA(国際美術教育学会)において口頭発表を行った(学会発表)。

**放課後の学校クラブ** プロジェクトの発案者である北澤潤が活動拠点を海外に移したことに伴い、プロジェクトの実施主体が地域(参加者)へと委ねられる局面を迎えた。このような状況を踏まえ、プロジェクトの継続の有無含めて部員との話し合いの場を設けた。その結果、部員からの希望により活動を継続することが決定し、新たにテーマを設けて新メンバーを募集した。新規メンバーも交えて準備を行い、平成30年3月25日には実施校のコミュニティールームにおいて「おばけのたからばこ」と称するオリジナルの学校を開いた。

**ワシントン現代芸術センター** 前年度に環境整備した「ワシントン現代芸術センター」を舞台に、アーティスト等を招いてトークセッションを行う「ワシントン芸術大学校」を開催した。平成29年4月15日には、陶芸家のきむらとしろうじんじんをゲストに招き、「アートではないアートについて」をテーマとする対談を行った。「小料理喫茶ワシントン」という具体的な場所で10年以上にわたって活動を続けてきた矢口と、各地で「野点」というアクションを通してそれぞれの風景と向き合ってきたきむらの対話を通して、路上における芸術のあり方などについての議論が展開された。平成29年12月2日には、編集者の都築響一を招いて「極東フアッションと私」と題する対談を行った。

### 3) 岩手県胆沢郡金ケ崎町におけるアクションリサーチ

平成 29 年 4 月より、研究機関が筑波大学(茨城県)から東北芸術工科大学(山形県)に異動したことに伴い、東北地方における新しいフィールドの開拓に取り組んだ。その際、筆者が平成 24 年より継続的にフィールドワークを行ってきた岩手県胆沢郡金ケ崎町の協力を得て、重要伝統的建造物群保存地区(伝建群)における研究拠点のあり方を構想した。このプロジェクトでは、伝建群内の保存物件を地域の芸術実践の拠点として開いていくことを目指している。金ケ崎町は 1979 年に「生涯教育の町」を宣言していることから、社会教育(生涯学習)の理念に基づき、住民の創造性を引き出すことができる場所として活用していく方針が取られた。

[平成 30 年度]

#### 1) 「農民芸術」概念に基づく「コミュニティ・スペシフィック」の理論構築

前年度の国際比較を踏まえて、日本における「コミュニティ・スペシフィック」概念の独自性を明らかにするための理論研究に取り組んだ。一つの観点として、宮澤賢治によって示された「農民芸術」を援用し、「生活の芸術化」を巡る言説の歴史的展開について考察した。一連の研究成果については「農民芸術」概念の現代的解釈をめぐって 地域芸術論としての側面を中心に(雑誌論文)として発表した。また、ここで組み立てた理論の具体的な実践の場として、後述する「金ケ崎芸術大学校」の整備を進めた。

#### 2) 茨城県水戸市におけるアクションリサーチ(継続)

前年度に引き続き、「放課後の学校クラブ」と「ワシントン現代芸術センター」について実践研究に取り組んだ。

**放課後の学校クラブ** アーティストのイニシアチブのもとに取り組まれていた段階から部員の保護者を中心とする参加者の自主的な運営への移行について実践を通して検証を進めた。本研究を通して、「コミュニティ・スペシフィック」な芸術実践の一つの特徴として、日常生活に根差した継続的な芸術実践を通して従来のコミュニティとは異なる「もうひとつのコミュニティ」が立ちあがることが示された。ただし、継続的なプロジェクトの実施にあたり、アーティストと当該コミュニティとの関わり方をどのように変化させていくべきか、という点については本研究期間内における検証が困難であったため、今後の課題としたい。

**ワシントン現代芸術センター** 研究協力者の矢口克信がスイスのバーゼルで開催されたアートフェア LISTE に出展したため、日本の地方都市における芸術実践に対する反応を調査するために実地に出向いた。出展に先だって、平成 28 年度に実施したアートプロジェクト《祭後のバーゲンセール》の記録集を作成した。上記の「放課後の学校クラブ」とは対照的に、「ワシントン現代芸術センター」では、矢口自身の場所との結びつきが強く、必ずしも「誰に対しても開かれた空間」にはなっていない。ただし、平成 30 年 12 月に「小料理喫茶」としての仮営業を始めたことにより、改めて「場所」が開かれつつある。一つの場所と 10 年間以上関わり続けることによる周囲へのインパクトについては、今後も協働での実践研究を進めていきたい。

#### 3) 岩手県胆沢郡金ケ崎町におけるアクションリサーチ(継続)

前年度に引き続き、岩手県胆沢郡金ケ崎町における実践研究に取り組んだ。平成 30 年度は、伝建群内の保存物件の一つである「旧菅原家侍住宅」を「金ケ崎芸術大学校」として整備を進めた。岩手県出身の詩人である宮澤賢治が「農民芸術」において掲げている「生活の芸術化」の理念を基盤に、日々の暮らしの様々な場面に創造性を取り入れていくことを目指している。具体的な方法として、「〇〇の時間」と称する枠組みを設定し、学生や住民がそれぞれの時間を実現できる空間として運営している。平成 30 年度には、「レジン」の時間(10 月 13 日・14 日)、「お庭の時間」(10 月 28 日)、「手しごとの時間」(11 月 2 日・4 日)、「薬膳の時間」(11 月 28 日)、「うるしの時間」(12 月 27 日、2 月 2 日・3 日)、「だがしのじかん」(3 月 16 日)を開いた。これらの成果を踏まえ、平成 31 年度には「城内農民芸術祭」と称する新しいアートプロジェクトの実践を通して研究を進めていく。なお、本事業には研究協力者の矢口克信も参加を予定している。

#### 4) 山形県山形市におけるアクションリサーチ

平成 30 年 9 月に東北芸術工科大学の主催によって開催された「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2018」を通じたアクションリサーチに取り組んだ。具体的な実践内容としては、大学内において「コラボレーション」をテーマにした空間をつくり、地域住民との協働による「山のようなヤタイ祭り」を企画した。本実践では、きむらとしろうじんじんが取り組む「妄想屋台」の手法と「放課後の学校クラブ」における一人ひとりの創造性を引き出す方法とを結び合わせることで、それぞれの実現してみたいことを「ヤタイ」という舞台を設えることで促した。なお、「ヤタイ」の設計にあたっては、「山形ヤタイ」のプロジェクトに取り組む追沼翼の協力を得た。一連の成果については、『まちまち General Art Annual 2019』において実践報告を掲載した。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

市川寛也、「農民芸術」概念の現代的解釈をめぐって 地域芸術論としての側面を中心に、美術教育学研究、査読有、第 51 号、2019、25-32

市川寛也、「コミュニティ・スペシフィック」概念の有効性に関する一考察 - 美術と場所の関係性を巡って -、美術教育学、査読有、第 39 号、2018、51-63

Hiroya Ichikawa, How Can Artists Establish a Creative Community?: Community- Specific Art in Japan, International Society for Education through Art Proceedings from 2017 InSEA World Congress Daegu, 2017, 368-373

市川寛也、地域との連携による芸術科工芸の教科としての独自性 全国質問紙調査の分析を通して、美術教育学研究、査読有、第 49 号、2017、49-56

〔学会発表〕(計 4 件)

市川寛也、怪異で遊ぶ人々 四国の秘境・山城大歩危妖怪村のこれまでとこれから、怪異怪談研究会、2019

市川寛也、日常とつながる鑑賞教育 身近な地域の観察を中心に、第 40 回美術科教育学会滋賀大会、2018

Hiroya Ichikawa, How Can Artists Establish a Creative Community?, 35th World Congress of the International Society for Education through Art, 2017

市川寛也、コミュニティ・スペシフィックな芸術実践を通じた地域創造力の開発 生活の芸術化へのアプローチとして、第 39 回美術科教育学会静岡大会、2017

〔図書〕(計 2 件)

石崎和宏 他、ミネルヴァ書房、初等図画工作科教育(分担執筆:第 12 章「図画工作教育の新たな取り組み」)、2018、143-154

宮脇理 他、BookWay、アートエデュケーション思考(分担執筆「地域とともにつくる開かれた美術の学び」)、2016、322-329

〔その他〕

研究成果報告書として、以下の二冊を発行した。

市川寛也 編、まちまち General Art Annual 2019、東北芸術工科大学芸術学部美術科総合美術コース市川研究室、2019

市川寛也 編、まちまち General Art Annual 2018、東北芸術工科大学芸術学部美術科総合美術コース市川研究室、2018

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：矢口克信、北澤潤

ローマ字氏名：Katsunobu Yaguchi、Jun Kitazawa

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。